

「美しい門」の奇蹟

エルサレム神殿の「美しい門」における生まれながらの足の不自由な男の癒しの出来事はエルサレムに一大センセーションを巻き起こした。驚いた群衆は一斉に弟子たちのところに殺到してきた。そしてそのことが、弟子たちにもう一度、イエスのよみがりの福音を大胆に宣教する機会を与えた。この奇蹟は誰も否定することは出来なかった。したがって、ここで問われているのはそのような奇蹟が起こりうるか否かではなく、それを起こしたと主張する「イエス」が本当に「メシア」であるか否かということであった。

事実、群衆もユダヤ教当局者たちも驚くべきことが起きたということを否定することができなかった(3:10, 4:14)それに対してペトロは、「イスラエルの人たちよ、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか」と問い掛け(3:12)そして、「あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです」と主張し(16節)人々の目をよみがえりのキリストに向けさせた。

このいやしの出来事は、生命のない戒律の宗教と化していた当時のユダヤ教(神殿宗教)と、人々を命と力へと変革する主イエスの救いの福音との違いを浮き彫りにする出来事であった。当時のパリサイ主義律法主義宗教の下では、このような生まれながら足の不自由な重度の障害者(しかも物乞い)は人々によって神にのろわれた者としてさげすまれ軽蔑され、また宗教的に汚れた存在と見なされ、神殿や会堂の聖なる行事からも完全に締め出されていた。

朝日、夕日に照らされてさんざん輝く壮大なエルサレム神殿の「美しい門」のかわらに座し、失意の中で毎日物乞いをしているこの男の存在は、戒律の宗教と変わり果てていたユダヤの伝統宗教の無力さを暴露するあざやかなしるしであった。ユダヤ教はこの男を絶望とあきらめの中に追いやるだけで、この男を救うことはできなかった。

このみじめな状態にある物乞いの姿は、人間の絶望的な罪の姿を象徴している。人間の罪の前には律法は無力である。今にも弱れんとしている人に、岸辺から泳ぎ方をどんなに教えてもまったく無意味であるように、律法(オキテ)は、それがどんなにすばらしい教えでも、人を救わない。なぜなら人間は神をオキテを守ることが出来ないからである。

オキテは人を救わない。救いはただキリスト・イエスから来る。キリストの十字架による罪の贖いとゆるし、そして信じる者に働く聖霊のダイナミックな力こそ、人間の魂の再生の力であり救いと希望の源泉である。

ペトロはそのことを強調する(3:12? 26)。イエスの十字架と復活は単なる偶発的な出来事ではなく、旧約の昔から神が預言者たちを通して繰り返し約束された出来事であった。神は預言者たちの口を通してキリストの受難を予告しておられた(18

節)。モーセもサムエルもキリストの到来を預言した(22? 24節)。あなたがたは預言者の子であり、神が先祖たちと結ばれた契約の子ではないか(25節)。だから、今こそ罪を悔い改めて救いを得よ(26節)。これは今日の私たちに対するメッセージでもある。